

本日の講座を通し、自分を見つめなおす意識を持つことができました。ありがとうございました。

日本語教師という職業柄、「共生」というと、日本に住む外国人との「多文化共生」ばかりを考えておりましたが、障害を持つ人との共生など、「いろいろな交差点で人を見て考える」もっと広い視点であることを知ることができました。正直申しますと、いろいろな人々の「本当の共生」ってなんだろうという新たな質問をいただいた気がします。

自身が海外で生活していた折、その国に同化することではなく、常に「日本人であること」を求められていたことにも気づきました。主に英国でしたが、ヨーロッパの国々や、旧植民地の方々、多様な人種などが一緒に暮らしてきた時間が長い国なので、それぞれのアイデンティティーを持ちながら共生する文化が当たりまえだったようです。日本語教師として、日本人への同化を求める抑圧者にならないことを常に心がけたいと思います。

今日は、ありがとうございました。

コーダについて、良く知ることができました。しかし、共生って、聞けば聞くほど難しいと思いました。ブレイクアウトルームでも、いろいろお話が聞けました。

私は、外国の子どもを教えています。以前、親の病院や市役所に付き添うため学校を欠席するという、小学1年の生徒を持ったことがあります。いくら日本語が少し話せると言っても、大人の会話を通訳できるほどの日本語力はありません。それでも、家では一番日本語ができるというのです。担任と相談はしましたが、話を聞いてあげることしかできませんでした。また、小4～5年の中国の子供の親から「全体学校に来るな」と言われたと相談されたことがありました。「日本語ができないから恥ずかしい」と言われたと。その子は全く中国語を話さなくなったと言っていました。

最近では、私の周りでもパートやアルバイトをする外国人が増えています。それは良いことだと思いますが、社員になるのは、なかなか難しいと聞いています。介護の仕事をする人も増えています。以前より少なくなりましたが、時々差別を受けていると聞くこともあります。本当に共生って何だろう？何ができるんだろう？と考えてしまいます。今日は、いろいろな話が聞けて良かったです。

今度、私の市で、「日本語学校、大学、病院の医師、企業、国際交流協会、日本語教室」が集まって、今後の共生を考える会議が開かれるようです。これからも考えていきたいと思っています。

中井先生、楽しみにしていた今日の時間、とても有意義でした。参加できて嬉しいです。

また、嶋田先生、このような学びの機会を作ってください感謝します。

私は、留学生も日本人もいる専門学校で働いています。留学生の方が数は圧倒的に多いですが、留学生は学校ではマイノリティです。それはなぜか考えてみると、校内で権力を持っている人が日本人でその人が色々なことを決めているからです。他の人には発言権や決定権はありません。ですから、力不足で残念ですが専門学校内の日本人の私の存在もマイノリティです。マジョリティとマイノリティの境界について先生は問われましたが、私は権力の有無が作り出すものだと思います。権力や地位がなければマイノリティを守ったり、マイノリティの安全性を確保することはできないので、それを否定しているわけではありません。

でも、権力や地位を持った時に、中井先生が最後におっしゃった『弱くある力』を権力者が自覚していないと、意識的にも無意識的にもそれを振りかざした瞬間、マジョリティとマイノリティの境界が作られると思います。もしかしたら、私自身も教室の中でマジョリティになり、自分の価値観を押し付けてしまっているときがあるのだと思います。

権力や地位は、留学生と日本人学生、スタッフが一緒になって相談することで、境界というよりはもっと交差的になって境が目立たなくなるするために、使われるべきです。学術的には対話なんです、相談という言葉が私にはしっくりきます。

日本語教師としてマクロな視点で考えると、どこにいても相談しながら一緒に作り上げながらお互いカミングアウトできる空間や空気が作れるようにすることが、私の目標です。

そしてミクロな視点では、ごまかしたりすることが当たり前になって、それさえ気づかない状態になっていないか、価値のない境を作り出していないか、時々自分の生き方を客観的にみることを忘れないでいようと思います。

皆さま、ありがとうございました。

「共生」ということの意味は、違うものを混ぜ合わせるようなイメージで捉えていましたが、今日の中井先生のお話を伺って、マイノリティとマジョリティという視点からこれを捉え、それを融合していくことであり、それを実現する上で重点となるのは、互いの理解、特にマイノリティ側の気持ちの理解を皆が深めることにあるという認識に至りました。とても大切な学びをいただいたと感じております。ありがとうございました。

本日のお話、またBORでのやりとり+そこへの質問(発言の仕方も含め)とても興味深い内容でした。

本日の話題の一つとして扱われていたLGBTにつきましても、すでに市の教員の方らがカミングアウトし、考え方をしる触れる活動や情報提供を自治体も身近にございます。また、非母語話者(学習者やすでに自律している方どちらの場合も)がマイノリティだからこそ提供できる価値を提供して、マジョリティのコミュニティ(社会と呼んでいい公共の場ですが)で利益を伴った活動をしている事例がいくつもあります。そういうことに自律的にトライしている(関わっている場をすでに巣立った日本語学習者、もしくは被支援者)、これからトライいくことができる(現時点で参加している学習者、彼支援者の)考え方のやりとりや関係性の構築は私が向きづいている以上にすでにたくさんあるのだらうと思います。

今日は私たちが自然にがマジョリティ、マイノリティとしての立場を柔軟にその場その場で行き来しながら、互いの差異を感じ取ったり、認め合ったりしてそこに「いる」ということを改めて言語化する時間を過ごせたと思います。

海外駐在経験のある方もBORにいらっしや、その方から赴任時の不安感とマイノリティとしての立場や経験に触れた言葉も出てきたことで、自分自身海外に教えにいくとき、その国でのマイノリティであることに加え、教師チームに参加する後発者としての感覚などを感じたことを共有できたような気持ちを覚え、内面の整理にもなりました。またそのお話を共有してくださった方から、それらの経験なども踏まえ「共生とは、相手の気持ちに気づいてあげられること、すくってあげられることではないだろうか」という言葉が聞け、とても腑に落ちました。

それらについて、ピッタリ同じ経験をしているわけではないし、指導や支援に関わる場も様々でBORで一緒にしたほかの方もご自身の在籍した組織では日本語学習者発信ができる活動を盛んにしていたが、そうでない組織もあるかもしれない(但し、必要だと思う)と配慮しながらの発言もあり、国籍や母語・背負ってる文化的背景の差異だけでなく、様々な考え方、立場の差において発揮されるのが共生を担う能力ではないかと感じました。またUDの国際会議も似た要素があったとお話してくださった方は、(それらの行動や活動、あり方の先に)「できないことを減らしていくことになるのでは」という言葉を発していらっしやいました。

BORでの非常に興味深い言語化も体験でき、中井先生の提供して下さった話題、レクチャーと合わせて、本日も大変勉強になりました。嶋田先生、中井先生、BOR / 寺子屋全体でお時間を一緒にさせていただいた皆様、本日もありがとうございました。

またいつかお会いできましたら、どうぞよろしく願い申し上げます。

今日のセミナーは、「共生」というとても広大なコンセプトへの取り組みでしたが、目に見える事象は違っても、真髄は共通しており、その真髄となる価値観を自分自身の中に確立していくことの大切さを実感しました。それは、社会的通念やこれまで自身の中で培ってきたものをもう一度見直し、再構築していくことではないかと思います。言葉で言うほど易しいことではなく、色々な状況や場面で直面する出来事に対処していくことは、本当に難しいと感じています。日本語教育での実践では、教師という立場から捉えた「権力の闘争」に知らず知らずのうちに入り込んでいることも少なくありません。学生のために良かれと思ってやっているつもりが、本当にそうなのか、と自問することも必要であることに気づきました。 それにしても、中井先生の温かいお人柄に魅かれました。他を受け入れようとするオーラのようなものがお話や各場面に散見し「北風と太陽」の対決で、北風ではなく、太陽が男の人のコートを脱がせることに成功したことを思い出しました。「共生」とは、自分の心を開き、そして相手の心を開いてもらうことであると思いました。とても有意義なセミナーでした。ありがとうございました。

中井先生がご自身の言葉でご自身の経験を俎上にのせた研究についてお話をくださったことに、心を打たれました。私自身は自分が社会的マイノリティであるという要素を抱えているからかもしれませんが、言語教育の現場で感じる違和感（e.g.ネイティブ信仰に由来する能力主義）にどのように対処したらよいのだろうか戸惑うことがしばしばあります。今日のお話では、そこで起きている事柄に向き合うための「対話」という方法を中井先生に教えていただいたと感じています。誰しもがさまざまな他者との関係性のなかでマジョリティとマイノリティの狭間を歩き来しながら自己の内部にマイクロアグレッションの芽を孕んでいるからこそ、他者との違いが交差するところに繰り返し身を置き、対話の視点を潜らせた再解釈を重ねていくことが大切なのだという中井先生のメッセージがじわじわと心に染み込んできています。昨年10月に文化庁がまとめた日本語教育の参照枠に「母語話者が使用する日本語のありかたを必ずしも学ぶべき規範、最終的なゴールとしない」という文言がありますが、では言語教育が目指すものは何なのか、それはいかにして達成されるのか、それを考えるヒントが本日の中井先生のお話にたくさん詰まっていたような気がしています。私も中井先生がそうなさっているように、自らの身体を通して語るべき言葉を獲得したいと思いました。中井先生、ありがとうございました。

ビデオオフandミュート参加で、失礼しました。

中井先生のお話やセッションから、多くの示唆を得ることができました。

第3の文化を作るためにも、親からの文化を継承しておくべきということやどうしても感じざるを得ないスティグマのこと...等。

論点の整理の仕方がすっきりしていてデザインセンスがよく、特に動画が素敵で、とても印象的でした。

私は外国人児童集住校に勤務しております。ブラジルからのデカセギ移民第二世代の子どもたちと多く接していますが、日本語がうまく話せない親とポルトガル語がうまく話せない子の間でコミュニケーションがうまくできなかつたり、親をリスペクトできなかつたり、ということもやっぱり起こっています。

彼らの母語母文化への価値づけを自然なカタチで、そして素敵な方法で、継続的に行っていきたいと、改めて思いました。

Muito obrigada !

其々は、ある程度の特異性は持っていますが、同じ人間であるという部分は同じなので、何らかの形で垣根を持たない関係性も持つ必要性があるのではないかと思った。

嶋田先生、中井先生、

貴重なお時間とお話をありがとうございました。

「共生とは何か」について、誰もが異文化多文化共有でき、平等で平和で安らかなことを願いながら、なかなか可能なことではなく、また願うものであって叶うものではないとつくづく思いました。歴史を見ても、明確に見て取れます。

健常者とディスアビリティ、少数派と多数派、強者と弱者、経験と未経験、日本人と外国人、これらに対立する、あるいは見えない差別と弊害を考えさせられ、中でも「社会的アイデンティティ」がキーワードとして残りました。

実は社会的アイデンティティによって苦しみ、自ら作った罫＝思い込みにかかっている方が今の時代多いのではないかと思います。ディスアビリティの方には優しくする、弱者には優しくする、そうした社会的なアイデンティティを踏まえ、両者が苦しめられているのではないかと思います。誰かが作った「型」により、苦しめられ、またそこからみ出た者を非難し、文句を言い、荒々しい感情がぶつかり合っています。コンパートする存在は、実は俗に言う「マウント」につながり、それらは実は自らを「特別」とする意義、または小さな自尊心の維持に欠かせないような行為、そうすることによって自らを確かめる世の中になってきていると思います。つまり、共生と強く謳われつつ、同じだけの力で反動が起こっているように見えます。

こうしたことに直面した際には、その都度「第3の文化」を考え、折衷案を練って行きたいと思いました。これは対外国人留学生だけではなく、日常的な全ての場面においてです。

最後に中井先生が仰ったご両親と「外での手話を控えた」ことについて、英語の「a」ではなく「The」の方を気にするのは当然なことだと思いました。私が同じ立場であっても、家から一歩外へ出れば「The」の方にシフトせざるを得ない。ここも第3文化の構築に向ける課題の1つだと思いました。まずは本日のところ、その一歩、入口に立ったにすぎませんが。

ありがとうございました。

コーダ、ソーダという概念を初めて知りました。障害、国籍、性別、その他、いろいろなカテゴリー分けをしていますが、人の数だけ違いはあり、境界は各々人と人との間にあることを前提にこれからも共生という課題に向き合っていきたいと思いました。とても貴重なお話を聴かせていただきありがとうございました。

中井先生の当事者としての真摯で貴重なお話を聴きながら、頭がグルグル動いて、とても刺激を受けました。中井先生のオートエスノグラフィーの映像も初めて見ましたが、とても素敵で感性が刺激されました。

中井先生が、心を開いてご自身のご経験や、内面の葛藤を正直にお話してくださったことに感謝します。複雑な心境が共感できました。

私自身で言えば、気づかぬうちに思いこみや勘違いをしているかもしれないこと、それを自覚することが大事だと思いました。

ブレイクアウトでも、他の先生方のご経験に基づく興味深いお話を聴きながら、言葉も文化も違う者同士がお互いに歩み寄って第三の文化を作れたら「共生」につながるのではないかと、思いました。

また、そこに日本語教師が貢献できる余地があると思いました。様々な人がいることを、他人事ではなく、より多くの人に関心をもっていただくことが、多文化共生社会への一歩かなと思います。まず身近な人に心を寄せたいと思います。

本当に貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

(長文お許しください。)

CODAの一人として貴重なご経験談を共有していただき、何とお礼を申し上げればよいのかわかりません。SODAという言葉も初めて知りました。可視化していただいたことでCODAがマイノリティーになったりマジョリティーになったりのお立場もよく理解出来ました。美しい海を背景にした先生のオートエスノグラフィを拝見し、昔々見た映画「Children of a Lesser God」(「CODA」のお母さん役Marlee Matlin主演)のプールでの何も音が聞こえない1シーンを思い出しました。

Zoom寺子屋でのテーマは「他言語話者とは『共生』できないのか?」でした。「共生」できるか否か以前に、わたしにはろう者が見えません。もしかしたら電車で隣り合わせた方がろう者かもしれません。もし分かる方法があるのなら、わたしはもっとろうの方々と様々なことを共有したいし、共生できるとも思っています。

ろう者がマイノリティーとされてしまうのは「聞こえない」からです。しかし、ろう者は車の運転もできます。色々な趣味もお持ちです。一方で聴者の中には感性が豊かでない方もたくさんいらっしゃいます。ろう者は弱者ではなく、聞こえないこと以外聴者と変わりません。ただ聞こえないゆえに日本語が第2言語になることがあります。わたしは日本語教師として、日本手話を母語としていらっしゃる方の日本語サポートができるかもしれないと思いました。それで手話を勉強し始めました。自分から見えないドアを探し、2つの空間をつなぐパイプ役になりたいと思っています。先生の講座を受けてその気持ちが強くなりました。どうもありがとうございました!

コーダという言葉自体全く知らない状況で参加させていただきました。マイノリティとマジョリティの捉え方がとても複雑で、一筋縄では理解し難いものでした。多文化共生と言う事での共生については多少理解していたつもりでしたが、深く理解できてないと自覚させられました。と同時にコーダという方たちの存在や、共生というものが人の取り巻く環境によって大きく違うということを確認することが出来たように思います。今回の公演有難うございました。

久しぶりにアクラスの勉強会に参加させていただきました。

お恥ずかしいことに中井先生の研究しているテーマについてはほとんど知らず、ただこのあと10年間くらい(もし教師を続けるならその教師観)を変えようという衝撃がありました。

現在私のクラスでは授業でマイノリティへのインタビュー(LGBTQ、障がい者)授業の後、自分事としてマイノリティをとらえ、地域の外国人へのインタビューや多文化共生地域のフィールドワークを通じて、マイノリティからマジョリティへの発信を考えるという授業をしています。

ただ改めて授業をしながら、自身や彼らはこの世界のどこに属し、マイノリティなのか、それともマジョリティなのか、いろいろ考え、自分の知識や視野のなさに答えが出ないまま授業に突入していました。

今回中井先生のお話を聞いて、自分がマジョリティ側にいるんだとあらためて気づきました。

そしてその位置が実はとっても重要であることも。

私はもしかして、マイノリティ側に立っている気いながら、マイノリティにマジョリティと同化するように今まで自分は留学生たちに指導していたのではないかと、と今までの教師としての自分を振り返ったりしました。

中井先生の「マイノリティでいる強さ」という言葉が印象に残っています。

今一番欲しい気付きだったような気がします。

そして、今後の日本語教師の社会でのありかたを考える時に、多くの日本語教師に知ってほしい内容でした。

中井先生、嶋田先生、素晴らしい企画をありがとうございました!

寺子屋が終わってから数日経ちますが、「共生ってなんだろう?」と考え続けては毎日違うことを思っている自分がいます。

昨日は、「マイノリティに共生を呼びかけることはマジョリティ側のエゴなのではないか」とも思っていました。

そして今日、たまたま聾者の方とお話する機会があったのですが、言いたいことがうまく伝わらない歯がゆさを感じると同時に、おもしろいことがあったときにいっしょに笑ったり、新しいことを教えていただけてなるほどと思ったりしたときは、こういう経験の積み重ねが共生なのかもしれないとも思いました。

たぶんこれからもいろいろなことを考えては上書きしていくのだと思いますが、もしかしたら、それが大事なことなのかもしれません。

今回の寺子屋で、考えるきっかけをいただいたように感じます。ありがとうございました。

参加させていただき、本当にありがとうございました。「共生」という意味を、その重み、その広さ、奥深さを、改めて考えさせられ、学び多き時間でした。言葉で簡単には感想を言い表せません。家族などの小さなコミュニティでの「共生」をも意識して行くのを常に感じているので、現場である「教室」をいかにの体験、考える場にするかを意識した授業展開をしてきています。が、その意味でも、新たな学び、発見がありました。本当に素晴らしい場を共有させていただきました。ありがとうございました。

あらゆる社会構造の差別を考えると、当事者からの「声」は大事だと思いますが、社会的弱者の代弁をすることもあります。家族が障がいを持っていたり、身近に外国人がいる場合は、よくあることだと思います。しかし、CODAであることは、聴者であり、自分自身はマジョリティに身を置くことも、マイノリティ家族の側にいることもできるとお話を聞いて感じました。話すことによって、解放されることもあると思いますが、心に痛みを感じるものだと想像しました。

CODAについて、詳しいお話を伺ったことで、自分が社会的弱者であることと強者であることを振り返ることができました。自ら望んで障がい者として生きるわけでもないのに、世の中には多くの差別があるでしょう。家族にろう者がいることで、CODAである子供がどんな生き方をしているか、初めて、しかも急激に、考えることもできました。この思いを共有してくださって、本当に感謝しています。

中井先生、このたびは貴重なお話をありがとうございました。

ろう者について考えることはあっても、その子どもやきょうだいにまで思いを馳せたことがなかったことに気づき、恥ずかしくなると同時にたくさんの気づきをいただきました。これほど複雑だとは思いませんでした。

わたしはコーダではありませんが、コーダが抱く感情と同じような感情はわたしにもあります。場面を変えれば多くの人が同じまたは似たような感情を抱いているということがブレイクアウトルームでの話し合いなどを通してわかりました。自分だけが悩んでいるのではないのだなと思いました。

特に最近見えない差別で疎外感がどんどん大きくなって爆発しそうになっていたのですが、「パートタイム的共生」と「サイレントマジョリティ」という言葉のおかげで、爆発しそうになっていた気持ちが少し収まりました。また、自分がやられて嫌だと思っている差別的なことを無意識のうちに他人にしてしまったことがあって自己嫌悪に陥っていたのですが、「人それぞれにマジョリティ性とマイノリティ性がある」という言葉で解決することができました。

ZOOM寺子屋の日にシェアしようと思って忘れてしまったのですが、この会の1週間ほど前に公開された動画である精神科医が「多様とは”理解し合えないこと”」と発言していたのが心にグサリと刺さりました。そもそも「共生」じたいがミラクルなことなのかもしれません。だからこそ、マイノリティな気持ちになったときには卑屈な気持ちにならずに伝えていくこと、マジョリティな気持ちになっているときは驕らずに真摯な心でマイノリティに耳を傾け、マイノリティの叫びに気づき改善していくことが必要だと思います。これが習慣化されれば、サイレントマジョリティもいなくなり、真の意味での「共生」が実現するののかもしれません。

またお話しさせていただく機会がありましたら嬉しいです。

嶋田先生、このような機会をお作りくださり、ありがとうございました。

今回のZOOM寺子屋はマジョリティとマイノリティについて考えるよい機会となりました。マジョリティ中心の社会からマイノリティとの共生社会へ、そしてマジョリティとマイノリティの境界がない社会へ進展できればと思います。それにはマジョリティ側の考え方を変えていく必要があります。お互いが権利を認めて理解し合い、分断から共生へと前進することを願っています。まずは身近なところからスタートしたいと思います。

ご自身の体験はもちろん、そこから色々な方への聞き取りを踏まえてお話ししてくださり、環境や他者との関わりによって100人100通りであることがわかりました。

父が病気から難聴になり、難聴者の方と関わるようになった時、生まれつきの聴覚障害とはまた違う悩みがあることを知りました。

「共生」というのはとても難しいけれど、一方的にならないために努力や行動が必要だと思いました。経験できないことは経験者や当事者から聞くということ、常に対話が必要であると思います。

私自身は家族が様々な障害を抱え、新たな「手帳」や「資格？」が加わるたびに世界が広がっていきます。これからも、見る角度を変えながら生活していきたいと思えます。

「私ができることって何だろう？」 また考えるきっかけをいただきました。

ありがとうございました。

映画「コーダ愛の歌」を見て、聾の世界やその家族の思いに触れてから、今回の寺子屋に参加しましたが、中井先生のお話を伺ってその当事者の方たちの背景の多様さ(ソータの方のことなど)に初めて気づきました。また、その方たちと所謂、健常者との関わりについても、一つ一つ丁寧に考える必要があることを考えさせられました。聾の方たち、コーダの方たちだけではなく、「共生」という言葉を聞いたり、自分自身で使うようになって久しいのですが、今は「多文化共生」の示す範囲の広さにも自分の想像が追いつかない状況です。そのような中で、今回の寺子屋では、自分自身がまた「共生」について考え直すことになりました。

単純な表現で言うと、私は共生のためにはマジョリティーがマイノリティーを受け入れるということがまず必要だと考えていました。でも、在日コリアンの方たちの「自分らしく生きる力」のお話を伺って基本的な考えを修正する必要があることに気づきました。普段の教育現場で一人一人の学習者の本当の気持ちが理解できているのかという疑問も感じました。相手に心を開いてもらえないと本当の気持ちを知ることは難しいことです。共生のためにはそのような問題を解決できる場が必要だと思いました。

学校や職場など、マイノリティ(だと思われる方)と直接触れ合える場所では共生という問題が目の前にあって、その問題を否応なく考えさせられると思います。でも、実際にはもっと広い範囲で、例えば自治体の単位でどんな人にも好きなら参加できるというような機会を増やすことなど、おらかな受け入れ体制が必要なのではないかと思います。「家庭菜園が好き」なら、市民農園へ、「体を動かしたい」なら市民体育館へ出かけ、同じ趣味を持つ人同士で心が開かれるような関係を作っていけるような環境を作るのも一つの方法ではないでしょうか。(その場合、市や区の情報を多くの方が確実に受け取れるような工夫も必要ですね)

ただ、このような環境が整っても、やはり個人個人の心の持ち方が大きな問題になってくるとは思います。異なった文化・背景を持つ方が目の前にいるのが当たり前という思いが共有できるような社会ができるといいと強く思いました。

「共生」ということを改めて考える機会をいただきました。映画『CODA』を観た時はそこまで考えが至らなかったのですが、日本語教育と大きく関わることだと考えを新たにすることができました。社会全体が変わっていくことは簡単なことではないと思いますが、ひとりひとりがステレオタイプな見方をせず、個と向き合うことで、変わるものは大きいと感じました。中井さん、貴重なお話をどうもありがとうございました。

大変に考え深いワークショップへの参加ができたことに感謝申し上げます。嶋田先生、中井先生、ありがとうございました。

感想を書くに当たり、あまりにも様々な思いがわき上がってきてずっと考え続け、一つの形に感想をまとめることが非常に難しくなっていました。その点をご容赦ください。

その一つが、テーマである、一他言語話者とは「共生」できないのか？一が、壮大かつ広義であり、しかしさらに副題である、一コーダとしての経験とマイノリティとの対話をもとに一が、非常に焦点化された狭義的な視点からの問題提起であるためでした。

映画「Coda あいのうた」に関する、ひつじ書房のサイト上の中井先生のメッセージから想起された記憶は、私自身がアメリカ在住時に知った、移民国であるアメリカで世代を継いで生きる人々の言語を取り巻く環境とそこから否応なく生き方を運命づけられてしまう人々のあり方でした。移民第1世代は命がけで新天地を求め、体を張って「生き」ていくわけですが、その多くが言葉（英語）は話せないため、第2世代の子供たちが家庭内で学ぶ親の言葉と英語のバイリンガルになり、親の通訳としての役割を負うことで命を紡いでいきます。第3世代になると完全な独立した英語使用者が生まれるわけですが祖父母や両親との「人」としての絆を図ったり維持したりするために母語継承語としての言語学習への意識や動きが顕在化していきます。例えば、第1、第2、第3世代のそれぞれが習熟度や生きる環境下での言語文化の違いから、ここで使用される2つの言語も、濃淡や解釈の差異が生まれ、もはや同じ言語とは呼べないかもしれない、ある意味で他言語的な要素をはらみ始めているのではないとも想像します。

映画の中でも表現されていましたが、主人公が親のために「社会での交渉役」として通訳をし続けなければならない現実、「人」が「生きていかなければならない」という待ったなしの状況下では、肉体的にも精神的にもそして時間的にも大きな代償と痛みを伴う行為であることは言うまでもないでしょう。

次に考えたのは、中井先生がたくさんのメッセージをお見せくださったパワーポイント内の表現です。その中で上述した、ある種、negativeな立ち位置から、codaの立場をヤングケアラーや避難民などと並べ、広義的かつ相対化する視点から一他言語話者とは「共生」できないのか？という問題を投げかけているように感じました。

そこでワークショップ参加者であり聴衆者であり、言語の教育の一端に関わっている自分自身との接点は何かという問いかけが始まります。

「共生」とは何かという素朴な問いが湧き上がりました。共生の「共」はともに、という意味ですから2者以上の物が対峙する場合、それらは等価であり対等な立ち位置でなければならぬからです。しかし何らかの障害やハンディを持っていたり、言語的にマイノリティだったりした場合、そもそも出発点が「共」でないという現実があります。

生物学者の深津武馬氏が、2004年、講談社の雑誌「本」に「共に生きるということの本質」を寄稿し、その文章が2007年から全国の高等学校の教科書（第一学習社）に採用されています。彼は生物学者からの視点で「共生」を捉えているのですが、そこで、共生（Symbiosis）を6つのカテゴリーに分けて説明しており興味深いです。生物Aと生物Bの関係は、1. 互いに得をする、相利（Mutualism）と2. どちらか一方が得をし、もう一方は損をする、寄生（Parasitism）または、捕食（Predation）と、3. 互いに損をする、競争（Competition）と、4. 一方は得するが、もう一方はどちらでもない、片利、偏利（Commensalism）と、5. 一方は損をするが、もう一方はどちらでもない、抑制、偏害（Suppression）と、6. 両方ともどちらでもない、中立（Neutralism）という具合です。「共生」には、生々しい「生」のダイナミズムがあって、共生の本質として6通りの可能性が存在するということになります。

→次のセルに続きます。



「共生」という言葉には異なる主体が互いに思いやりを持って共存するという、調和的、平和的、利他的な関係性のイメージを醸し出すが、その実現をめざす高貴な精神であつてもともに生きることの本質から目をそらしてはいけなと結んでいます。

これら生物の本能的な側面を踏まえた上で、思いを来したのが「人間」が持つ高次の感情です。アメリカ在住時に好きで良く使った英語の言葉があります。カタカナ英語で日本ではよくシンパシーは耳にしますが、それよりもEmpathyが好きでした。その後、言語の教師を続けながら気になっている言葉はCompassionです。これら3つの持つ意味は、辞書で確認すると1. Sympathy. は「相手のつらさや悲しみを理解する」2. Empathyは、相手の立場に立って、相手の気持ちや経験を理解・共感する、感情移入する」3. Compassionは相手の立場が分かった上で、助けるために行動する」というニュアンスが含まれています。1. も崇高な感情ですが、2. には想像力が含まれ、3. にはさらに行動が含まれるところが「共生」というキーワードにpositiveな光を当てられるように思いました。

最近、偶然、YouTubeで色覚異常の人のために矯正眼鏡をプレゼントして、生まれて初めて色を見る人たちの反応や感動の瞬間を集めたものを見ました。ほとんどの人たちが眼鏡をかけて感動の涙を流すものでした。彼らの苦しみや辛さを思いやる、心の動きはもちろんあるわけですが、同時に彼らが見てきた（見ている）色のない世界はどういうものなのか興味を持ったのも事実です。私たちが属しているマジョリティかマイノリティかという観点から見れば、色のない世界もまた現実に存在している一つの世界には変わりなく、もし無色がマジョリティなら悲しみや苦しみといったnegativeな感情は伴わないはずだからです。

他言語「共生」の実現は、まず知らしめる、つまり存在の認知から始まり、存在する世界に等価なものとして興味を持ち、その後、それらに何らかなnegativeな側面があるのならsympathy、さらにempathyの心を涵養することが大切なのだろうと考えました。何よりも言語に携わる者ならば、compassionをもつことで「共生」を体現することに近づけるのではないのでしょうか。